

パリ・オリンピックとダンス：

多様な身体表象と国民概念の再編
越智雄磨（東京都立大学）

本発表は、パリ・オリンピック（以下パリ大会）開会式に表象された人種的・文化的・ジェンダー的諸水準での身体多様性に注目し、その配置が国民概念の再編をどのように示したかを考察するものである。IOC がしばしば用いる「多様性の中の統一」という言葉が示すように、パリ大会は国民の身体的多様性を可視化しつつ、国家理念を再提示する場として構想されたと考えられる。

フランスにおける国民国家の基盤は、エルネスト・ルナンが 1882 年に行った講演「国民とは何か」に求められる。ルナンは、国家は人種・宗教・言語の同質性ではなく、人々の共和政の理念への自発的同意によって形成されると論じた。このモデルは共和政的な普遍主義として継承され、教育や文化政策を通じて国民形成を支えてきた。

しかし現実には、普遍主義は常に人種や宗教、階級をめぐる差別と併存してきた。2023 年ナンテールでの警察暴力事件後の抗議行動は、普遍主義と人種主義が二重基準として作動していることを如実に示している。国民国家への統合の外部に置かれた身体をいかに取り込むかは、フランスにおける持続的な政治課題である。この矛盾は、エティエンヌ・バリバルらが論じたように、国民国家が普遍主義を掲げながらも差別や排除を構造的に再生産することに由来する。パリ大会開会式は、この緊張関係を舞台芸術の水準で一時的に解消し、再編しようとする試みとして理解できる。

こうした状況を踏まえ、スラヴォイ・ジジェクはパリ開会式を「ヨーロッパ的普遍主義」の実践と評した。その際、彼はカント『啓蒙とは何か』における理性の「私的使用」と「公的使用」を援用する。ナショナリズムや民族主義は一国家や宗教に奉仕する「私的理性」にとどまるが、開会式が立ち上げたのは人類全体に開かれた「公的理性」の場であった。ジジェクは近年のポリティカル・コレクトネス（PC）について、差別は正を目的に拡大した一方で、それが「硬直した道徳主義」へと傾斜するジレンマを指摘している。しかし彼は、開会式をそのような PC 的演出ではなく、カント的な公的理性の実践として評価する。すなわち、開会式は PC 的規範に依拠して表象の範囲を狭めるのではなく、批判を厭わない挑発的な身体や文化カテゴリとして分割されてきた身体を同じ空間に並置することで、排除を超えた公共性を象徴的に提示した。

開会式をみると、序盤にはキャバレー風ダンスやフレンチカンカンが登場し、続いてノートルダム大聖堂修復現場および付近での群舞（コンテン

ポラリーダンス）、アクロバティックダンス、アヤナカムラの楽曲に合わせた MV 風ダンス、ブレイキンや BMX、ヴォーギングやドラッグクイーンのパフォーマンス、子どもと黒人男性による KRUMP、さらに移民系と白人系双方の若者文化が交錯するクラブカルチャー発のエレクトロなど、多様なジャンルのダンスおよび身体が配置された。

特筆すべきは、パリ・オペラ座初となる黒人系エトワールのギョーム・ディオップのソロや、同じくエトワールのジェルマン・ルーヴェがストリート／クラブカルチャーやヴォーギングの身体と共演した場面である。パレエという国家的象徴が、移民系の文化やクィア文化と共存することで、中心と周縁、伝統と革新、国家の身体とマイノリティの身体の交錯が可視化された。

他方、このドラッグクイーンの出演については、性的少数者の側から「多様性の暴走」という批判も寄せられた。これらの懸念には、当事者ごとの性的多様性を正確に理解してほしいという意識と同時に、表象の範囲を規定して逸脱的な身体を排除しかねない PC 的規範の作用も見て取れる。これに対し開会式は、あえて異質な身体を共存させることで、包摂と排除の線引きを宙吊りにする普遍的公共空間を提示したと考えられる。

また、軍楽隊の身体が配置されたことも注目される。軍楽隊の行進する身体は、17 世紀から 18 世紀にかけて成立した近代軍隊の「規律訓練された身体」の系譜を想起させる。その身体がアヤナカムラの楽曲にあわせ踊りに組み込まれる場面は、規律と遊戯の交錯を演出した。この並置は、本国の象徴である軍隊と旧植民地の背景を背負う身体を同じ舞台に置くことでもあり、フランスの国民概念が帝国主義的過去と不可分であることを示していた。

さらに、開会式においてスポーツ選手の身体と芸術的身体が同時に提示されていた点が重要である。選手団の入場は国別に編成され、その身体はナショナルなものの表象として機能した。他方で、芸術的身体は、普遍的価値を開示するものとして開会式に配置された。スポーツの身体と対照において、ジジェクが開会式を「フランス国家を含むあらゆる「私的」制度的枠組みからアイロニカルな距離を見事に確保した」と評したことの意味が、より明確に理解される。

本発表は以上の考察を通じて、パリ大会開会式を国民国家概念の再編の場として位置づける。多様な身体表象は、国民を単一的な枠組みに統合するのではなく、多層的なあり方へと開く試みであった。それは、フランスの共和政が準拠してきた国民国家の枠を相対化し、象徴的に更新する試みであったとも言える。他方、この新たな「統合」から逸脱する身体についても今後注視したい。